

古今雜談思出草紙〓東隨舍

俗耳鼓吹〓大田南畝

消閑雜記〓岡西惟中

賤のをだ卷〓森山孝盛

醒睡笑〓安樂庵策伝

近世商賈尽狂歌合〓石塚豊芥子

4

日本隨筆大成

第三期

吉川弘文館

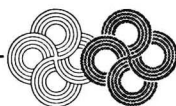
日本随筆大成 第三期 第二卷
昭和四年七月十五日発行

編纂者 日本随筆大成編輯部

代表 早川純三郎

発行者 桜井庄吉

発行所 日本随筆大成刊行会



日本随筆大成

〈第三期〉4

昭和五十一年十二月二十五日 印刷
昭和五十二年一月十日 発行

編者 日本随筆大成編輯部

発行者 吉川圭三

発行所 株式会社 吉川弘文館

〒113 東京都文京区本郷七丁目二番八号
電話東京八一三一九一五二〈代表〉
振替口座東京〇一三四四番

製作 株式会社 たんちよう社

解 題

本集には、古今雜談思出草紙、俗耳鼓吹、消閑雜記、賤のをだ巻、醒睡笑、近世商賈尽狂歌合の六種を収める。

古今雜談思出草紙

十卷

東 隨 舍 著
とう ずい しゃ

本書は、全十卷六十四条より成り、古今諸国にわたつての巷説奇談を記したものであるが、自序に「善をすすめ、あしきをこらす種にも」という如く、勸善懲惡・因果応報を説いた話が殆んどすべてを占め、いかにも説教臭がつよすぎ、ままた書に見えたる話をも録しており、しかも行文にしまりがなく、話そのものもさして面白いものがない。

本文中、年記のある話のもっとも新しいものは享和元年のことであるが、その自序は天保十一年のものであり、その頃に成つたものらしく、時に著者は六十余歳であつた。

著者東隨舎は、江戸牛込に住した人で、小身の武家の隠居であつたように思われるが、その伝は未詳。あるいは、森銑三先生の指摘の如く、貸本屋向けの著述をしていた人であつたかもしれない。旧版隨筆大成凡例には、その氏を栗原としているが、由る所を知らない。隨筆大成に収録されることにより、初めて版行された。

なお今回の重刊にあたっては、国会図書館写本を参看した。

俗^{ぞく}耳^じ鼓^く吹^{すい} 一卷

大田^{おおた}南畝^{なんぼ} 著

大田南畝の随筆は、本大成にも大部な「一話一言」をはじめ、数種を収載しているが、本書もまたその一つで、音曲に関する事項その他のことどもを記して、極めて趣味に富んで居り、南畝の並々ならぬ音曲通であったことなどの知られる点にも感興が惹かれる。天明八年の自序があり、「からうたのくすい、俗耳のいしはり云々」としているのによって、その書名の謂われが知られる。

本書は、写本によって伝えられていたのが、明治年間「燕石十種」その他に収められて、活字化せられた。今回の重刊にあたっては、東大写本により校合を行なって頭註等を補い、国会図書館写本（燕石十種三輯ノ三）をも参考とした。

著者南畝の略伝は、第二期第二巻の「仮名世説」の解題を一見せられたい。また同期第十四巻の「奴師^{やつし}勞^{らう}之」の解題下にも諸家の研究書についての追記がある。

（小出）

消閑^{しょうかん}雑記 一卷

岡西^{おかにし}惟中^{ちゆうちゆう} 著

本書は一卷五十五条より成り、歌に関する記事が最も多く、ついで連歌・俳諧より詩文・書法にまで及び、更に国語の訓や清濁撥促にも多く説き及んでいる。著者の国文の自序があるが、これの成った年は明らかではなく、歿後百十余年を経た文政八年、晋臥鵬の跋を附して刊行された。

先に「百家説林」に収録せられ、今回の重刊にあたっては、国会図書館文政八年版本によって比し校た。

著者惟中についての略伝は、第二期第二巻所収の「一時随筆」の解題を参照せられたい。

賤のをだ巻 一卷

森山孝盛 著

本書は、著者森山孝盛が七つ八つの小童の頃、即ち延享年中より見聞したことを、六十半ばになりて書きつらね、子や孫に「ふるきをたづねて、あたらしきを弁へ侍る媒とも」為さんためにしたものである。その内容は、人情世態の移り行くさま、殊に服飾・髪型・小間物・歌舞・音曲等を主とし、学術・書画・武芸・俳諧より、役者・相撲取・隠売女・泥棒また巷談街説に至るまで、すべて五十九条より成り、風俗史研究の資料として好箇のものである。その記述は自序に引いた兼好法師の「何事も古き世のみぞしたはしき」という姿勢で貫かれており、行文は甚だ精彩があり読者をして倦ましめない。

享和二年春の、埋木の人しれぬ翁と署した自序があり、其の頃に成ったもののようである。

今回の重刊にあたっては、国会図書館写本（燕石十種一輯ノ六）によって校合を行い、東京大学図書館写本をも参考とした。

著者孝盛の略伝は、第二期第二十二巻に収載せられた「種焼藻の記」の解題を一見せられたい。

（北川）

醒 睡 笑 八巻

安楽庵策伝 著

本書は、わが国の古い笑話の一大集成書として知られている。わが国の笑話集中、量においても質においても、本書の右に出ずるものはない。

この書の成った謂われについては、策伝の自序と跋と京都所司代板倉重宗の奥書とによって明らか

にせられる。策伝は小僧の頃より、聞いておかしく感じていた話の、反故の端に書留めて置いたものを、元和九年の七十歳のときに取出してみると、「おのづから睡を醒して笑」ったというところから、醒睡笑と名づけ、その一千有余話を八巻に分かったものにしたのだった。元和元年のころ、板倉邸において重宗にすすめられるままにその中の話をし、この醒睡笑を俟に上っている。

醒睡笑は、耳で聞いた話の筆録という点に特色を有する。そしてその中の話には、今日の落語の原話を成すものも見出される点に興味がある。

本書は早くから刊行せられて、版を重ねている。本大成所収本は、万治元年の刊記ある版本を底本としているが、それは写本として伝わっているものの抄出である。写本は国会図書館、内閣文庫、静嘉堂文庫等に所蔵せられている。その内の静嘉堂文庫本は、御書物奉行だった鈴木白藤の筆写本である点に注目すべきものがある。

著者安楽庵策伝は、幼くして出家し、やや長じて京に上り、洛東禅林寺において智空甫叔について修行した。それより後、諸寺の住職を経、慶長十八年六十歳にして京都誓願寺の法主となり、元和九年同寺を退いて同寺内竹林院に隠居し、かたわらの安楽庵に生活した。偈安堂と称する茶室をつくり、当時の貴族、文化人とまじわり、数奇人としての生活を楽しんだ。自ら裂をつくったりもして居り、世にこれを安楽庵裂といい、名物裂として茶器の袋などに用いた。寛永十九年正月八日に寂した。寿八十九。

なお策伝の出自については、「安楽庵策伝」（昭和36年）の著者関山和夫氏によって、飛騨高山城主金森長近の弟であることが明らかにせられた。但しそれにはなお考究を要するものがあるといわれている。

版本には重宗の奥書は附せられていないのであるが、いまは旧大成本を踏襲して置くこととする。

近世商賈尽狂歌合 二卷

石塚^{いづか}豊芥子^{ほうかいし} 著

本書は、豊芥子の嘉永五年春の自序によって識られるように、文政十二年の滝沢馬琴の跋のある屋代輪池（弘賢）、馬琴合作の二十三番狂歌合を知人より贈られたことよりして、その内容を補輯してこの一冊としたので、嘉永六年初秋の旬癡叟黙老（柳下亭）及び同五年二月末の八日の万亭応賀の序、同年正月の梅彦の跋がある。

旧大成本の凡例によると、本書の底本としたものは関根博士の蔵本によるものであったというが、いまその在処が識られない。今回の重刊にあたっては、国会図書館所蔵の写本によって校合を加えた。

著者豊芥子は、称を石塚重兵衛、家号を鎌倉屋といった。別号に集古堂というがある。祖先は相模国鎌倉の人で、天明年中に四代前の曾祖父が江戸に来て、神田豊嶋町に住んだ。代々芥子を粉にするを生業とし、人々から芥子屋と呼ばれ、豊嶋町の芥子屋の意で豊芥子と名のつた。そうした稼業の間に珍書古本を求め、蔵書家としての名が高く、一面には好劇家としても識られ、河竹黙阿弥とも交った。文久元年に京都へ旅立ったが、途中で病んで引返し、その年十二月十五日に歿した。年は六十三であった。著作に、江戸歌舞妓年代記続編、深川大全、岡場所考、岡場遊廓考、その他がある。

豊芥子については、笠亭仙果と仮名垣魯文とが書いた略伝の、新群書類従第四に収載せられるものが根本資料となっているが、外には、森銑三翁に「豊芥子・黙阿弥・学海」の一文があつて、それは同翁の著「明治人物夜話」の内に収められている。なお森鷗外の澀江抽斎伝の中にも抽斎の友人の一

人としての記載がある。

さらに一事を附記すれば、馬琴と輪池の合作になる「近世商人狂歌合」(二十三番狂歌合)が都立中央図書館に蔵せられている。同書の附録二十八種は馬琴の自筆で、旧蔵者小杉楳邨の識語がある。興味ある人はそちらの一読をも願うこととする。又同書を喜多村筠庭が補記した「近世流行商人尽狂歌」というものが「喜多村寄せ本」と題するもののなかに収められて居り、これも同じく中央図書館に所蔵されている。

追書 以上を草した後、金子和正・大内田貞郎「共古翁雅友帖抄」(『近世大阪藝文叢談』所収)という、山中共古にあてた諸家の書翰の抜書を一覽に及んだら、林若樹翁の左の書翰をみたのでここに参考までに掲げて置くこととする。

先月中旬、初めて中川老人を相尋ね申、種々風俗に関する珍書(これハ此節の御笑草。今様職人尽狂歌合判、並ニからしやの其行商等の沿革を書す等、)を一覽致候。(明治三八・九・四 林若吉)

とあり、中川得楼より若樹翁が一見に及んだ「今様職人尽狂歌合」は、すなわち「近世商賈尽狂歌合」であった。同翁は借覧して写しを作られた(明治三九・三・二五書簡)ようであるが、いまそれはどうなったであろうかが知れない。なお国会図書館に蔵する本書は、右中川氏旧蔵本である。

(小出)

目次

古今雜談思出草紙	一
俗耳鼓吹	一三
消閑雜記	一七
賤のをだ卷	三五
醒睡笑	三九
近世商賈尽狂歌合	三五

(解題 北川博邦 小出昌洋)

思 出 双 紙

古今雜談思出草紙序

いつも唯、心ばかりは和歌の浦、よせるも知らぬ老のなみ、立居せわしき世の海の、あまのたき繩と果しなく、流れて早き年月に、書あつめたるもしほぐさ、浜の真砂の尽しなす。昔と今の雜談を、及ばざる筆に記せしも、六十歳に余る老の坂、なす事もなくいたづらに、世を小車のいそがしく、送る伝に聞置し、好める道の物語り、心にうかむ言の葉の繁きをばぶき、たらざるを尋たるも、善をすゝめ、あしきをこらす種にもと、思ひ出草しとぞ名付たり。元来天が下たる鄙に育ちたる身のものしらざれば、其文のをもて拙なく、仮字文章のはこびも知らで、心尽して書年も、なき水ぐきの跡先も、分らざる事のみにして、もの知る人に見すべき草紙にはあらず。唯草子のはなしの種とせんのみ。

于時天保十一年庚子仲夏

牛門西隅

東 隨 舎 誌

目次

卷之一

日向国高智穂峯の事
神田社神霊の事
新田の社霊験の事

九 碑文谷仁王霊験の事
一〇 狐のうた読し事
三 賊心、性質に備る事

三
四
七

卷之二

匹夫にも義と恥をしる者のある事
狐、人に化したる事
丹波の国門太夫方狐の事

三 狐に贖て欺き、狐の為に死する事
三 狐、往古を物語る事
四 南都雨面の事

五
七
六

卷之三

青柳村に回国修行者を忌事
贖金を拾ひ殺さるゝ事
狐、父の敵を討事

三 石塔に奇瑞ある事
三 天王坂妖怪の事
三 景清が亡霊歌読事

四
五
六

卷之四

陰徳陽報の事
疱瘡除守之事

三〇 梅に奇木ある事
三二 金を見て心を変ずる事

四四

卷之五

通り悪魔が事
和歌を詠で妙ある事
天に口なし。人を以て言はしむる事

四六 奇怪なる老女の事
四七 殺せし賊の家に泊る事
五二

五三

卷之六

情け有て立身せし事
堪忍強く出世の事
忠臣、主人を助る事
芸術修行に妙なる事

五九 中橋稻荷靈驗の事
六〇 嫉妬深き女の事
六四 土中より亡魂出る事
六五

六六

卷之七

竹原隠居夢休が事
北国の飛脚、死霊の為に乱心する事
茶碗屋敷の事
佐野稻荷の事

七三 小舞の歌、唱歌の事
七四 流行唄の類ひ、代々に其風変る事
七五 大石良雄が作小唄の事
八〇 掛川宿の小童子歌読む事

八二

卷之八

岡崎宿煙草屋歌読む事
風雅、貴賤によらざる事
老尼、陰陽の理を弁ずる事
画難坊、絵を論ずる事

六 画難坊、絵を論ずる事
六 浮世絵、むかしに替る事
六 菅神靈夢の事
六

五 五 九

卷之九

夢に一首の歌を得る事
夢に三ツの発句を得し事
不思議の靈夢を蒙りし事
人情、其形ちによらざる事
拾ひし金を返す事

一〇二 非情、有情に変ずる事
一〇三 松、化して石となる事
一〇四 傾城の薄情欺き偽る事
一〇五 狐、人に恋慕せし事
一〇六 大寺の住僧不仁の事

一〇七 一〇七 一〇六 一二 二三

卷之十

世に稀なる陰徳者有事
陰悪露頭の事
戲場役者市川団十郎家伝の事

二六 癆症の妙薬を得る事
二八 稀なる清直なる者の事
三〇

二七 三〇